

2016年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期／短期）

所属・職・氏名：社会学部・教授・佐藤 哲彦

研究課題：ハーム・リダクション政策の歴史と近代社会におけるその意義に関する研究

留学期間：2016年4月1日～2017年3月31日

留学先：イギリス・ロンドン

ロンドン大学ゴールドスミス校

研究成果概要（日本文（全角）の場合は3,000字（A4、2ページ）程度）

今回の留学は「ハーム・リダクション政策の歴史と近代社会におけるその意義に関する研究」と題し、ここ30年ほどかけて欧州を中心に発展してきた「ハーム・リダクション」と呼ばれる薬物政策の発達の歴史を調査・記述し、それらを踏まえて近年のそのような刑事政策上ならびに社会政策上の変化が、近代社会のどのような傾向を指し示しているのかについて考察するための研究を目的としたものであった。また同時に、そのような研究について、受け入れ先の教員であるフェザーストン教授やロンドン大学ゴールドスミス校社会学部のスタッフ、さらには欧州各地の研究者らと議論することを目的とした。これまでも私は主に科研費を主たる財源としてハーム・リダクションに関する研究をいくつかの側面から行ってきたが、今回も科研費による調査を重ねつつ、とくにハーム・リダクションの歴史的な発展と変容に焦点を当てて行うことにより、社会政策上の変化が近代社会において意味するものについて集中的に研究を行うこととした。

そこでまず最初に、ハーム・リダクションの発展した場所の一つであるイギリスにおいて、それに関係する資料を閲覧し、必要なものについては複写などを収集した。今日その名で呼ばれる施策の出自は実はオランダであるが、ハーム・リダクションという名称それ自体はイギリス発祥といってよいからである。主な資料収集先は、滞在先のロンドン大学各種図書館ならびに大英図書館である。とくに大英図書館には定期的に通い、さまざまな角度から、当該の施策が導入されることになる社会的・政治的文脈や周辺の社会的事情を示す資料も含めて収集した。また同時に、イギリス各地の古書店などから1970年代後半以降に発行された薬物使用に関する雑誌や書籍などのうち、これまで手に入られていないものも収集した。これらの作業により、イギリスが当時ハーム・リダクションを導入することになった社会的および政治的文脈を把握することが可能となった。また留学の最初の段階で、以前からの調査研究によって知遇を得ていた薬物政策に関するNGO活動家や研究者らをロンドンのオフィスなど訪ね、彼らの協力により、具体的なインタビュー計画を立てた。彼らにはすでに留学前からロンドンに1年間滞在すること、その間に上記のタイトルの研究を進めることなどを伝えてあり、そのため対象者の選定などは比較的順調に進み、とくに夏季以降は欧州各地に調査に出かけることになった。その結果、今回の留学中にインタビュー調査を行った対象者は約30人にのぼった。

今回の留学中のハーム・リダクションに関するインタビューは、イギリス、オランダ、ポルトガル、ドイツ、スイス、オーストラリア、レバノンの各国で行った。なお、ハーム・リダクションに直接は関連しないものの、当時の社会的文脈との関係があり、とくにHIV/AIDS問題と

関連した団体の責任者にはこのほかにもイギリスやアイルランドでインタビューも行った。以下に順を追ってそれを述べておくことにする。

イギリスではまずは NGO のスタッフ、ならびにイギリスにハーム・リダクションを導入することに指導的役割を果たしたことで国際的に知られる旧知の研究者にインタビューを行った。彼らにはその経験についてライフヒストリー的な側面を含めて話を聞くと同時に、各地でインタビューすべき実践家や研究者について紹介してもらった。

次に、オランダでは旧知のハーム・リダクション活動家であり、また国際的にもこの領域で知られた人物に、これまで聞いたことがなかったそのライフヒストリー的な側面も含めてハーム・リダクションと後に呼ばれる施策導入の経緯について話を聞いた。

夏季には、ハーム・リダクションとは直接関係しないものの、当時の HIV/AIDS 感染問題として世界的に社会問題化したものに、血友病患者が使用する血液製剤 HIV 汚染問題があるため、その調査も行った。ハーム・リダクション導入は HIV/AIDS の流行と切っても切れない関係にあるからである。そこで当時の事情に詳しく、またその対策や補償問題に取り組んだ前世界血友病連盟会長にもアイルランドでインタビューを行い、HIV/AIDS 問題の世界的な文脈について議論した。血液製剤の HIV 問題については、イギリスの血友病協会においてもインタビューを行った。

ポルトガルでは EU 委員会の管轄下であり、欧州の薬物問題の情報を収集し分析しているリスボンの EMCDDA (European Monitoring Center for Drugs and Drug Addiction) の担当者にインタビューを行った。EMCDDA の訪問は 2009 年以来二度目の訪問である。前回彼女にインタビューを行ったときには、彼女とロンドン大公衆衛生院の Rhodes 教授がハーム・リダクションに関するモノグラフを編集している最中であつたが、その後 2011 年にそのモノグラフが刊行され、それが現代のハーム・リダクションを考える上で最も重要な文献の一つとなった。そこでその経緯とともに、彼女がそのようにハーム・リダクションにたずさわることになるキャリアについてもインタビューを行った。また彼女の紹介で、ポルトガルでハーム・リダクションを進める活動家らにもインタビューを行った。そこでは当地で展開する施策の歴史的な文脈について詳しく話を聞くとともに、リスボンで運営されている過去および現在のプログラムについても詳しく話を聞くことができた。さらにその EMCDDA 担当者の紹介で、その後にドイツとスイスの研究者を訪ねることになった。

ドイツではフランクフルトとベルリンで調査を行った。フランクフルトでは、当地にハーム・リダクションを導入した当初に、それを主導した担当者と当時の彼の下でこれを運営したスタッフにインタビューをするとともに、市内で施設を運営する責任者に話を聞き、また施設を見学した。その後、フランクフルト郊外に位置する欧州最大のハーム・リダクション施設を訪ね、その運営を担うスタッフらにインタビューを行い、施設を見学した。ベルリンではハーム・リダクション導入当時の市の公衆衛生担当部門の責任者に会い、彼女に導入当時の文脈と施策導入の経緯などについてインタビューを行った。また当地の NGO 運営者を訪ねてインタビューを行った。彼女はドイツでハーム・リダクションを導入する以前から使用者支援の活動にたずさわっており、そのキャリアなども含めて極めて重要な話を聞くことが出来た。また彼女の紹介もあって、スイスの重要な研究者に話を聞くことが出来ることになった。

スイスではスイスにハーム・リダクションを導入した研究者に、彼がベルンで設置した、世界で初めて制度的に認められた薬物使用施設やその施策についてインタビューを行い、その後現在そこから移転して運営されている施設を見学した。またジュネーブではイギリスでハー

ム・リダクションを導入した初期にその運営にかかわっており、その後、ハーム・リダクションの父と呼ばれている活動家にインタビューを行った。彼の紹介でイギリス帰国後にはイギリスのハーム・リダクションの中心地であったリバプールでインタビューを行えることになった。さらにチューリッヒでは、HAT (Heroin assisted treatment) と呼ばれ、その後オランダなどにも輸入される麻薬を処方する治療法を導入した研究者にインタビューを行った。1990年代の薬物政策はスイスがモデルとなったと、多くの研究者や実践家が指摘しているのだが、そのスイスも当初はハーム・リダクションに肯定的ではなかったものの、いくつかの興味深い出会いや関係性の接続によってその施策が導入されることになったという経緯があることが明らかになった。そのようなさまざまなディスコースの接続による全体の編成の変化が、ハーム・リダクションの現代における諸状況を形作っていることが、これまでの調査で示唆されている。

その後、再度オランダで調査を行い、HAT に影響を受けた薬物を処方する施策の導入過程についてインタビューを行った。また、後にハーム・リダクションと呼ばれる施策の発祥の地であるロッテルダムの薬物研究 NGO では、これまでの調査結果の概要について発表を行い、それについて研究者らから幾つかのコメントをもらった。長くハーム・リダクションにかかわり、活動ネットワークのハブ的な役割を果たしている活動家との話し合いでは、今回の調査研究で示唆された知見の多くについて有意義なコメントをもらうことができた。

以上が留学中の研究成果の概要である。上記調査の合間にはゴールドスミス校でスタッフと当該調査研究などについてしばしば議論した。2017年度は、これらの成果について、とくに社会学的な分析をもとに学会発表を行う予定である。